

三ヶ口瀬戸



四つの瀬戸と三つの湾

能登半島の中央部に位置する七尾湾。能登島を囲むように広がる七尾湾は、四つの狭い海峡「瀬戸」によって三つの湾に分けられている。

この、四つの「瀬戸」の中でも、最も海が狭くなっている場所は、七尾北湾と七尾西湾を区切っている「三ヶ口瀬戸」である。

「三ヶ口瀬戸」の「三ヶ」とは、通、田尻、久木のこと、この集落が密接な関係であったことからそう呼ばれた。

春の陽気に誘われるように三ヶ口瀬戸へ出かけることにした。

気持ちのいい青空が広がっていたのだが、風が強く船が出せなかった。車で向かうことにした。七尾湾は、春と秋にはよく風が吹く。このことで、春と秋には湾に浮かぶヨットの姿を多く目にすることができる。

ツインブリッジのと

優雅な曲線を描く能登島大橋を渡り、最初の信号を左折

すると、道路は木々の間を走る。しばらくすると、道の両側に農地が広がり、二本の橋脚が木々の間に見え隠れするようになる。中能登農道橋、通称「ツインブリッジのと」である。

平成11年に開通したこの橋は、長さ620m、幅8mの斜張橋で、能登島通町と中島町長浦を結んでいる。

この橋が架かっている周辺は、能登半島国定公園の保護区となっており、複数の橋脚を造ることができない。そのため、周辺の浅瀬を利用して、特徴的な二本の橋脚が建てられた。

晴れた日にこの橋を渡ると、なぜか、いつもすがすがしい気持ちになれる。



橋を渡り、長浦うるおい公園に車を止め、「ツインブリッジのと」を歩いてみることにした。

この公園には、展望台があり、「ツインブリッジのと」

の美しい姿を能登島をバックに望むことができる。

橋の上へでると、かなり風が強かったのだが、運良く立山まで望むことができた。

北湾と西湾の境界になつている「通り鼻」(能登島通町)と「茂崎」(中島町長浦)の距離は400m程であろうかかなり近く見える。

橋上から真下の海を眺めると、海が緑色に見え、かなり深いことがわかる。

中島町史には、この深い海について「アオイの下の大亀」という民話が載っている。

この民話によると、三ヶ口瀬戸の海の深さは33尋(約60m)もあり、大きな海亀が住んでいた。この深所をアオイの下といい、干ばつの時に、笠師保の大覚寺の住職が、雨乞いをしていたそうである。ここで、酒樽を海に流すと亀が浮上ってきて、酒を一気に飲んで帰っていき、2、3日

もすると雨が降ったという。

「ツインブリッジのと」の架かる三ヶ口瀬戸は、湾内で、最も狭い場所であるため、干満による潮の流れが速く海の底が削られたのであろうか。60mは大げさな気もするが、かなり深い場所もある。

猿島と長者

この瀬戸のほぼ中央には、猿島が浮かんでいる。この島の名は、かつて、対岸の長者ケ鼻に住んでいた「長者(大金持ち)」が、この島まで藤で作った綱を渡し、飼っていた猿を行き来させていたことよってついたそうである。(長者ケ鼻の名も、長者が住んでいたことであつたと言われている。)

また、この島には色々な植物が生えているが、猿を渡す綱に使ってしまった、藤だけは生えていないという。

この長者が作ったものであろうか、島には、石塔や地蔵もある。

しかし、「島の中に入ると、風が吹いて帰られなくなる」といふ言い伝えなどがある不思議な島である。



民話伝説の多く残る「猿島」

海の難所

猿島の周辺には、岩礁(小島?)や浅瀬が混在している。海底が、かなり起伏に富んでいるのだろうと想像できる。この海峡は、航行する船に

は、七尾湾一の難所であろう。

この難所を見ていると、妖女、ローレライ(通行する漁師を誘惑し、船を難破させる)が腰掛けていたヨーロッパ西部を流れるライン川の岩場を想像させる。

しかし、能登島と本土が最も近いこの場所には、かつて渡し舟があり、往来が盛んであった。

高毛の渡し

この、通と対岸の中島町長浦の高毛間は「高毛の渡し」と呼ばれ、渡し舟が不定期で

お客を渡していた。

能登島では、大正末期まで、急用で本土へ渡るときにはこの渡しを利用したそうである。

この渡しは、対岸から呼ぶと聞こえるほどの距離なので、それぞれ渡したものが迎えに行くという掟があつた。

「ツインブリッジのと」が架かる今では、渡し舟の姿は見ることができないが、多くの民話や伝説が残るこの瀬戸は、美しい神秘的な場所にかわりない。

この、島と本土を結ぶ大切な道を、次はぜひ、船で訪れてみようと思う。

周辺マップ

